

南寮八番室の友：  
藤岡蔵六『父と子』と第一高等学校時代

|       |                                                                                                                               |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室<br>公開日: 2024-09-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高重, 久美<br>メールアドレス:<br>所属: 大阪市立大学 |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-008">https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-008</a>                             |

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to  
Osaka Metropolitan University

|                    |                                |
|--------------------|--------------------------------|
| <b>Title</b>       | 南寮八番室の友：藤岡蔵六『父と子』と<br>第一高等学校時代 |
| <b>Author</b>      | 高重, 久美                         |
| <b>Citation</b>    | 文学史研究. 56 卷, p.168-183.        |
| <b>Issue Date</b>  | 2016-03                        |
| <b>ISSN</b>        | 0389-9772                      |
| <b>Type</b>        | Departmental Bulletin Paper    |
| <b>Textversion</b> | Publisher                      |
| <b>Publisher</b>   | 大阪市立大学国語国文学研究室                 |
| <b>Description</b> |                                |

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

## 南寮八番室の友

### ―藤岡蔵六『父と子』と第一高等学校時代―

高 重 久 美

#### 一 藤岡蔵六と第一部甲類・第一部丙類の友

哲学者藤岡蔵六 [1891.2-1949.12] は、文学者芥川龍之介 [1892.3-1927.7]、法哲学者恒藤(当時井川)恭 [1888.12-1967.11]<sup>①</sup>と第一高等学校時代(明治四十三年(1910)九月～大正二年(1913)七月)を、第一部乙類(英語文科)<sup>②</sup>の同級生として過ごした親しい友であった。<sup>③</sup>彼を調べる内に、関口安義氏の詳細な論考『悲運の哲学者評伝藤岡蔵六』に蒙を啓かれたが、関口氏の述べる「人づき合いのまずさ」・「他者への配慮を欠いた性向」。そこからの「悲運」とは異なる観点から、纏めることができるのではないかと考え続けてきた。基盤は藤岡蔵六の遺著『父と子』を読むことにある。<sup>④</sup>「長男眞佐夫氏の『父母の思い出とともに』も参考とする。<sup>⑤</sup>

『父と子』は、「伊豫國宇和島市の南方三里、岩松川の中流に深い淵があつて、其處に幾つかの大きな岩が聳えて居る。岩淵と言う村の名は是れに基いたものらしい。村は人家凡そ百軒、其一番東の端の家で私は生れた。」(一 岩淵村、藤岡)に始まり、父母とやさしい三人の

姉に囲まれた幼少期、第一高等学校入学(九二 文科一年乙類)を経て、「二一八 一高卒業記念旅行」、「二二〇 東大文科哲學科へ入学」、「二二一 父の死」の大正二年(一九一三)で擲筆される。<sup>⑥</sup>藤岡は二十年間の病床生活の後、昭和二十四年(一九四九)に亡くなったが、「病や、小康を得」て、この回想録を「昭和二十三年七月十六日」(はしがき)までに書き上げ、眞佐夫氏によって昭和五十六年九月に私家版で上梓された。

藤岡は深く思索する人間で、芥川の良き理解者であったことを前々稿で考察した。<sup>⑦</sup>一高二年生の春休み、明治四十五年(一九一二)三月末の井川が和歌一首を賤けとした旅の記(二〇三 常陸旅行)は、前半、蔵六の人の好意を細やかに感じ取る心、本人の素直な心、後半、日立鉾山の「陰惨な坑内作業」、劣悪な労働環境への視線や、社会意識、時代への鋭い洞察、古典や歴史の教養など、バランスのとれた見事な文章である。蔵六、二十一歳。旧制高校生、一高生の柔らかな感性、教養の厚み、深さを感じる。<sup>⑧</sup>

藤岡には、親友であった芥川、井川ら第一部乙類(英語文科)の同級生以外に、心に残る人々がいた。「東京の田舎者見たような感じ

のする」(九三 寄宿寮) 第一部甲類杉村英三郎と第一部丙類「獨法科の快男子」(九八 冬休み) 岩松三郎である。二人は、芥川、井川、長崎と共に、『父と子』にフルネームで記される。一年時の寄宿寮は、各科各組の者が寄り集まって一室を成していた。故に、藤岡は「南寮八番」で二人と交友を持った。ちょうど井川が南寮十番で第一部甲類(英法科)の矢内原忠雄と親しくしていたように。

本稿は、一高一年時に寄宿寮で藤岡と同室であった杉村と岩松を考察する。その交友は、藤岡の、「人づき合いのまずさ」・「他者への配慮を欠いた性向」ゆえの「悲運」と評される人間像とは別の一面を示す。藤岡は、愛媛県北宇和郡岩淵村(現宇和島市津島町岩淵)に生まれ、県立宇和島中学校(現県立宇和島東高等学校)を卒業、当時「東京から往復一週間以上かかる」(九八 冬休み)地から、はるばる天下の秀才の集まる第一高等学校に入学した。「新橋驛に降りた時人込みの烈しいのに驚いた。田舎ではお祭り騒ぎの時にでも、こんな人出は見られなかった」(九一 初上り)。その彼が四谷須賀町にある杉村家を度々訪問し、お正月には、下谷区車坂町の岩松家に遊びに行った。芥川・井川を対象とした前稿で、近代思想・文学を醸成した交友のあり方が認められたが、文学者や哲学者ならずとも、一高における緊密な人間関係に支えられ、個性豊かな幅広い教養を身につけた人格が形成されたことが、杉村や岩松との交友から探れそうである。考察の方法として、杉村や岩松に彼ら自身で記したものが残っておらず、一高時代の交友の有りようが芥川、井川のようには辿り難いため、杉村は、父澄、長兄陽太郎という、外交官二代・杉村家の人々の記録を、岩松は後年の彼自身と、彼を知る民法学者我妻栄、最高裁判事真野毅氏ら

の言をもとに考察する。

## 二 「東京の田舎者見たような感じのする」杉村英三郎

### — 外交官二代・杉村家の三男 —

杉村英三郎 [1891.3-1949]<sup>⑧</sup> は、カナダ、ヴァンクーヴァー生まれである。

寄宿寮は新寮が四棟、旧寮が二棟都合六棟あって、全校生徒は悉く寄宿寮へ入って生活することになって居た。舎監が一人居たけれど、之は名目丈けの者で、全寮に自治が許され、万事は寮生の合議によって決裁され運営された。中學時代嚴重な校則によって束縛されていた私は、範籠<sup>(10)</sup>から解放された小鳥の様に自由の天地を飛翔することが出来た。

私の室は南寮八番であった。同室に東京の田舎者見たような感じのする杉村英三郎と言う男がいたが、彼は質實剛健で、西郷隆盛を敬慕してゐた所から何時しか私と仲好しになり、私は度々四谷須賀町にある彼の宅を訪問した。

一年生の時は、一室に各科各組の者が寄り集まってゐたので、違った組の様子も分かり、色々な特長も見られたので面白かった。

### (九三 寄宿寮)

杉村との交友には後日談がある。

待ちに待った夏休みが来た。七八両月休暇だから私は一年有半振りに帰省することが出来る、何をお土産に買って行こうかと考

えた。先ず皆に共通な物として栗饅頭をと思ったが、生憎品切れだったので甘納豆にした。(中略)

X X X X

夏休みに帰省した時、郷里の人達は、私に何科へ入ったかと尋ねるので、私は一高の文科へ入ったと答えた所、彼等は訝し気に「何故家業をお継ぎになりませぬか?お医者様はお嫌いですか?」等と訊くので、私は医者が肉体の病気を治すように、私は精神的に人々を救済してやるのだと言いたかったけれど、余り烏計がましいので止めた、と同時にそう言い切るだけの自信も無かった。

X X X X

夏休みが終って再び上京する時、円明さんが岩渕川で釣った鮎を、柔らかな遠火で焙って貰い持参した。東京では杉村の宅で度々御馳走になったので、其返禮として此干鮎を贈った。後で杉村が、此間の鮎は堅かったと言ったから、私は、干鮎を煮るには数時間前水に漬けて置けば柔らかくなる、鮎は香魚とも言って焙って煮れば一種獨特の好い香りがすると教えてやった。

(一〇八 土産物)

杉村は「質實剛健で、西郷隆盛を敬慕してゐた所から何時しか私と仲好しになり、私は度々四谷須賀町にある彼の宅を訪問した。」「杉村の宅で度々御馳走になった」とある。杉村家は、陸奥国岩手郡盛岡に南部藩士の次男として生まれた父潜〔889.2-1906.5〕が自ら志願したブラジル弁理公使として、明治三十九年五月に客死<sup>(1)</sup>、第一高等学校英法科をへて、東京帝国大学法科大学政治学科の学生であった長兄陽太郎〔884.9.28-1939.3.24〕が二十一歳で家督を相続した。陽太郎

は、四十一年大学卒業と同時に、父の志を継いで、外交官及領事官試験に合格、同年領事官補として研修のためフランスのリヨンに派遣された<sup>(2)</sup>。藤岡が一高一年生であった四十三、四年も、リヨン大学でフランス語と国際法を勉強、フランス語で「海港国際制度論」という分厚い論文を書きあげ、法学博士の称号を得た。当時、四谷須賀町(現東京都新宿区須賀町)には、南岩手郡加賀野(現盛岡市)の南部藩士長嶺忠司の三女、母ヨシ〔887-1913.12〕、東京帝大理科大学数学科の学生である次兄欣次郎〔889.5.16-1981.10.16〕<sup>(3)</sup>、三人の妹、ソウル生まれのアサ〔1893-1981〕、ナミ〔1895.10.7-1985.7.24〕<sup>(4)</sup>、台湾生まれのタカ〔1898.4-1980〕がいた。

夫潜が初代ヴァンクラーヴァー領事となったヨシは、明治二十二年九月、生後四ヶ月の欣次郎を抱いて太平洋を渡り、カナダ生活を終えて、二十四年九月彼の地で生まれた六ヶ月の英三郎も連れて帰国<sup>(5)</sup>、明治三十八年四月赴任先に帯同したアサ、ナミ、タカと共に到着したブラジルで、夫が他界するまでの一年一ヶ月を三代目公使夫人として務めた<sup>(6)</sup>。ヨシはおおらかで闊達な人柄で、ヴァンクラーヴァー領事をトッブとする在留邦人社交界でも評判が良かった。領事館に出入りする邦人を「大層親切で上下の差別なく善く世話をなさいました」と領事館邸の女中であつた女性に回想する。最後の任地ブラジルでも「公使令夫人は親切な人であつた。私の様な青年にさへ、只一人で御案内のそぞろ歩きの勞をいとはなかつた程思ひやりのよいお方であつた。」と「伯國日本移民の草分」鈴木貞次郎は語る<sup>(7)</sup>。

潜について、鈴木は記す「體格からして、角力取りなら十兩取位ひな値打の充分にふめる太った肉付で、身長もそれに應じて高かつた。

餘り物数は云はない。何處かに陰気な影のほめきながらどっしりと落付いて如何にも長者らしい風格があつた。……黙々として行はんとする所は生死を眼中に置かなかつた態度は、その象の様な柔和な眼に鋭く閃いて居た。」

「伯國公使として日本移民契約に對する功勞の第一人者は誰が何と云つても杉村公使其人でなければならない。あの彪大な聖州珈琲園報告は邪気のない彼自身の表象である。……私は一種の植民文學的氣韻の漂渺たるものを感銘して恍惚たらざるを得なかつた、この報告は慥かに日本の官民にとつて或る驚異であつた。伯國と云ふ解かなければならない謎が移民會社と外務省との前に砂漠のオーシスの如く展開された、伯國日本移民最初のページに杉村氏の如き人が公使として駐在して居たと云ふことは天祐に近い幸運であつた。」と。

ブラジル政府は「日本移民実現への杉村の努力を高く評価した。そのために、杉村の葬儀は国賓としての盛大なものとなつた」「国賓として扱われた杉村は、公館のあつたベトロポリスから鉄道の特別列車でリオまで運ばれ、陸軍の礼砲とともに葬られた。」<sup>(22)</sup>

鈴木が「感銘して恍惚たらざるを得なかつた」また「日本の官民にとつて或る驚異であつた」とまで記した「彪大な聖州珈琲園報告」<sup>(23)</sup>には、「一八七〇年の廢藩で失職、翌年上京して高名な儒者島田重禮（一八三八～九八）の下谷の漢字塾に学び、後にはその塾頭となる」という藩の漢字に精進した経歴が生きていた。英三郎次妹ナミの嫁いだ化学者の柴田雄次 [1882.1.28-1980.1.28] も、少年時代に大田南岳 [1873-1917] の私塾で、漢文の素読を教わっていた。南岳は江戸の文人として高名な、狂歌作家でもある蜀山人、大田南畝（一七四九

（一八二三）の曾孫であつた。ナミの通称は、生まれたソウル市にある南山という美しい山の名から取られた南美子であり、長男の名「南雄」は、父と母から一字ずつ貰っている。その名の由来について、南雄は、父としては、「南」の字はソウルの南山もさることながら、親しく師事していた南岳やその曾祖父南畝の「南」でもあることが、おそらく意識にあつたろう。と記している。近代日本の知識人にとって、漢字は重要な学問であり、彼らには、漢籍の素養があつた。<sup>(24)</sup>

長兄の陽太郎は一二才から一八才の間、両親が在外中のため、嘉納塾に預けられ柔道はもちろん、嘉納治五郎 [1860-1938] の考えで、水泳にも習熟した。一九〇一～〇四年、第一高等学校生徒として、柔道部と、二年生からはボート部に所属した。「一九〇五年には講道館の紅白試合で、のちに十段となつた三船久蔵と対戦して勝つた。」一九〇五～〇八年、東大法科政治学科の学生であつた頃、新渡戸稲造 [1862-1933] が一高の校長になつた。その際、「一高の先輩として、『毛唐を女房にしている校長の排斥運動』の先頭に立つた。陽太郎は和風の思想、新渡戸は洋風の思想で、ぶつかったのであつた。しかし、この運動のためお互いの理解が深まり、陽太郎はのちに新渡戸の人間性に傾倒することになり、また新渡戸は陽太郎の実力と、強い責任感、心配りの深さを認めるようになった。」一九二一～二二年には軍縮會議の随員。「身長一八〇センチメートル、体重一二〇キログラム、柔道六段の巨漢で、通常の日本の外交官の持つていない資質を備えていた。」一九二七～三三年、ジュネーヴ在住。新渡戸の後任として、国際連盟事務次長兼政務部長。新渡戸は陽太郎について、杉村君は真にもの、あはれを知る日本人である、<sup>(25)</sup> と言つて喜んだ。「一九三四」

三六年、在イタリア大使。一九三五年、JOCの委員として、次回オリンピックの開催地を決めるIOCオスロ総会で、孤軍奮闘した。ムッソリーニ首相を口説いて、ローマに決りかけていたのを、東京に誘致した。<sup>(36)</sup>「一九四〇（昭和一五）年、いわゆる紀元二六〇〇年のオリンピックを東京に誘致するため、国際的な顔をフルに活用して活躍、誘致は成功したのに、日中事変の泥沼化で政府は返上を決定したため空しい努力に終わった。」一九三七―三九年、在フランス大使。「杉村大使が若い頃、セーヌ河の競泳大会に出場して一等賞をとれたことが話題になったとき、大使はつぎのように言われた。「いや、あのときは本省から怒られましてね、ホンシヨウハ、キカンヲ、セーヌガワキヨウエイタイカイシユツジョウノタメバリヘハケンシタモノニアラズ」という電報がきましてね」」「当時バリに柔道の道場がいくつかできたが、その道場開きに出席された杉村大使が、柔道着姿で相手を空中へ投げ飛ばしている見事な写真が新聞に大きく出たりしたのも、杉村大使の人気を表わすものであったと思う。」<sup>(38)</sup>「やがて病を得て帰国、十四年三月二十四日没。五十六歳。その功績により外務省は省葬を実施した。」<sup>(39)</sup>

「最期も間近のころ、病院のベッドからはみ出しそうな巨体から絞り出すような声で、見舞いに行つたわれわれを逆に励ましてくれたのを思い出す」とナミの長男、甥の南雄<sup>(35)</sup>。長くなったが、英三郎が尊敬し、範にしたであろう陽太郎という人間を追った。

次兄欣次郎は数学者。大正十五年東京高等師範学校教授時に欧米各国に留学、昭和二年帰朝、七年時東京文理科大学教授兼東京高等師範学校教授<sup>(37)</sup>、戦後、東京高等師範学校第十五代校長兼東京文理科大学第

六代学長を務め、日本数学会名誉会長となった。紳士という表現がぴったりの温厚な人物で、文理科大学教授時代、選ばれて学習院中等科在学中の皇太子（現天皇）に数学をご指導申し上げた。矢野健太郎氏「1912-1993」は、「杉村欣次郎先生を偲ぶ」で、この計報に接して最初に思い出したことは、欣次郎の兄の、昭和の始めに外交官として大活躍をした陽太郎大使から、その名を聞いたときのことであると記し、語る。掛谷宗一「[1886-1954]」先生はよく次のように言っておられた。「宮中から皇太子殿下の先生を推せんしてくれと言われても、数学者は、奇人・変人・数学者と言われるくらいで、みんな少し変っていて、ふさわしい人を見付けるのに困ってしまうのだが、よくしたもんで、杉村君のような紳士がちゃんと一人はいてくれたからね」と。冒頭の思い出は次のように記される。「私は昭和十一年にフランス政府招聘留学生の試験に合格して、二年間の予定で、パリ南端の大学都市内にある薩摩会館からカルチュ・ラタンにあるアンリ・ポアンカレ研究所へ通つて微分幾何学を研究するという生活を始めていた。」<sup>(40)</sup>「当時は、日本の主な祭日、たとえば天皇節（天皇誕生日）には、パリ在住の日本人が全部パリの大使館へ集まって、その日を祝うという習慣があつた。私もそれに出席したが、そのような折に大使は、誰彼のへだてなくいろいろと話しかけ、われわれ留学生にも話しかけて下さった。「矢野君はアンリ・ポアンカレ研究所で数学を研究しておられるのだしたね。僕の弟も数学を専攻しているのですよ」、これが杉村欣次郎先生であつた。」

すぐ下の妹アサは、アルゼンチンからチリへの長く厳しい旅を体験した物怖じしない少女であつた。「十二、三歳と、七、八歳位に見え



る公使令嬢が居た。姉さんの方は才ばしつた方で、妹さんはまだほんの無邪気一方であった」と鈴木は記す。潜は「ブラジルだけでなく、アルゼンチン公使も兼ねていたが、着任の年すなわち一九〇五年の二月中旬から翌年二月中旬まで三ヶ月をかけて、アルゼンチンとチリを巡回する。この旅行はまず鉄道と船でモンテビデオ（ウルグアイ）をへてブエノスアイレス（アルゼンチン）に到り、西進してアンデス山脈中腹の、当時鉄道が通じていた終点まで行き、峠の数キロはラバの背に乗って越え、再び汽車でチリのサンチャゴに、さらにはその南方のコンセプシオン近郊の農村視察を果たして帰るという長く厳しい旅行であった。」これに母ヨシに代わって長女が同行した。それが十二歳の才気煥発なアサである。彼女の日記が嫁いだ福島家に現存している。左記は一九〇六（明治三九）年一月の、その往路の部分である。

十二日土 今日ラバにのりて朝七時頃にラスクヘバシを出たり  
午前八時半頃ちよーぢょーにつけり 道のりは二哩半ばかり 一時頃グアルドイアビエヂヤにつきてここにて昼飯を食したり 四時四分の瀟車にて発しロスアンデスに六時半に着しここにて夜飯を食し大そー見物されたり 七時にここを発したり 午後十一時にサンチャゴにつきたり 十二時にねたり

二〇世紀初頭にラバに跨がった十二歳の日本人少女が、アルゼンチンとチリの境の、標高七〇〇〇メートルのアカンカグワを望むアンデス越えを経験した珍しい記録である。

ここまで杉村家の人々を見てきた。英三郎自身は、長兄陽太郎と同じく柔道部に属し、弁論部であった（『校友会雑誌』）。二年時は東寮総代でもあった（『向陵記』）。

『校友会雑誌』第二〇一号（明治四十三年十二月廿日）  
柔道部々報

○十月廿一日 新學期第一回の小會を催す、（杉村は紅組）

○十月廿八日 大學少會に招かれて、對大學紅白練習勝負を行ふ、

○部員昇級並編入 杉村英三郎 右一級二編入ス

『校友会雑誌』第二〇三号（明治四十四年三月二日）

辯論部報

○十一月一日（火）練習會例場に於て

（二）日韓合邦と吾人の責任 一、一、一 杉村英三郎君

『向陵記』第四卷（明治四十五年）

◎一月廿二日 はれ

\*\*\*といふ人が不正の行為があつたので ひるの時間に中堅会<sup>(3)</sup>の相談があるそうだ……ひるの決議では中堅会全員がなぐる といふのであつたが 其後東寮の独法の連中が異議をとなへて 各寮の総代が なぐることになつたそうだ

○鉄拳制裁

中堅会の委員が「オイ杉村」「\*はきてゐるか」などとさ、やく……「わが中堅会は二部二年三の組\*\*\*に対して 制裁を行ひます これから宣告文を朗読します」……「北寮中堅会」……「朶寮」……「西寮」……「中寮」なぜあんなことをした」……おほりに杉村君が「東寮 もうあんなことをしてはいかないぞ」と ひどいこと鉄拳をくらはせる

柔道部と弁論部に所属し、東寮総代であつた英三郎は、父潜、母ヨシ及び、男男・女女女の六人兄妹のうち、父潜、長男陽太郎、長女ア



サに通じる人物であったと推測される。弁論部練習会の「日韓合邦と吾人の責任」という演題には、父潜が明治二十四年京城公使館書記官兼領事として対朝鮮外交の中心となり、日清戦争後の二十八年、三浦梧楼〔1846―1926〕公使とともに閔妃事件に参画したことが響いている。一高卒業後は、大正六年東京帝国大学法科大学政治学科を卒業、昭和七年時鴻池信託株式会社東京支店長、十一年六月二十六日取締役選任、二十年三月三十一日現在三和信託株式会社常務取締役、二十年五月一日―二十一年三月二十八日三和銀行取締役の履歴が確かめられる。<sup>(38)</sup>

藤岡が英三郎と親しくなったのは、彼が生粋の江戸児の、スマートな青年でなく、「東京の田舎者見たような感じ」で通じるものを感じ取ったからであろう。杉村家は父潜、長兄陽太郎とも外交官であった。しかし、両親とも東北岩手の出身であった上に、藤岡が訪れていた明治四十三、四年頃は、父潜既に亡く、戸主陽太郎も在外中であり、おそらくで闊達な母ヨシの許、東京帝大生の欣次郎、一高生の英三郎、四谷の雙葉高女生のナミ十五歳を挟んで、アサ十七歳、タカ十二歳の女学生三姉妹の杉村家に浴け込んでいたようだ。知的な若人の集うサロンのような活気を呈していたと思われる。

欣次郎が数学者、ナミの夫雄次が化学者であることは既に見たが、欣次郎の長男杉村新〔1923―〕は地球科学者、アサの四男福島新吾〔1921.5.2―2013.5.1〕は政治学者、ナミの長男柴田南雄〔1916―1996〕は音楽学者であり、「以下は冗談話だか、ともかくわたしの親族には学者、とくに理科系の者が多く、わが家の法事などで父方と母方の双方の従兄弟達とその次世代の者が大集合した時などに、この顔

触れなら私立の理科系の単科大学ひとつぐらい、わけなく作れるのではないかと思ったものだ。三代にわたるジェネレーションから、学長、教授、助教授から講師、助手まで、ほとんどの学科をカバーできる。医者は、一人しかいないが、言語学や法律の専門家もいるから、一般教養も埋まる。ただ、肝心な資本家と経営者に欠けるから所詮は空想大学だが。」と南雄。<sup>(39)</sup>

藤岡が訪れていた頃の杉村家は、南雄の言う初代に当たり、学問の雰囲気があるとはかたなく、漂っていて、学問好きの藤岡には心地良い空間であつたろう。

また、杉村家は、作曲家・音楽学者の柴田南雄が生まれたように、音楽が身近にある環境であつた。これには、一二歳、一〇歳、七歳のアサ、ナミ、タカが父潜のブラジル赴任に同行したことが大きかった。「首都リオ・デ・ジャネイロは猛暑の地だが、外国公館の所在地のペトロポリスは高地で気候がよく、イギリス人外交官の子供などとフランス語を喋って遊」び、上の二人はピアノを習った。ナミは帰国後も、東京音楽学校出身の音楽教育家、小松耕輔〔1881―1961〕から出稽古を受け、嫁入り道具に銀座の十字屋で一七〇〇円だったという燭台の二つ付いたドイツ製SELLERのアップライトピアノを持参。息子の南雄に、表題や解説はポルトガル語とスペイン語とフランス語の三カ国語で書かれ、裏表紙にAsa, Nami Sugimuraとサインのあるブラジルでの教則本を使って、四、五歳ごろからピアノを教えた。最後にみた稽古はシューベルトの、変ロ長調のヴァリエーション形式の《アンプロンプチュ》（作品一四二の三）であつたという。妹のタカ、鈴木貴子（高子）もピアノの稽古をかなり長く続けていて、南雄の小学

生時代、《舞踏への勧誘》などを柴田家のピアノでよく聴かせてくれた。次兄欣次郎もピアノを多少は嗜み、留学していた独ゲッティンゲン（月沈原）ではオペラや音楽会によく通い、若い時代のギーゼキングのことなどをよく覚えていた。

杉村家は、現在の新宿区須賀町にあり、ナミは「その実家から手巻きの蓄音器と自分の好きなレコードを人力車で運んで来ては聴いていた。その中に、当時の大ソプラノのジェラルディン・ファラーが歌ったアイルランド民謡があつて、」南雄の子供心にも美しいと感じさせた。後に《讚美歌四六七番》（日本基督教壇出版局、一九五四年）の旋律であることがわかったという。<sup>(40)</sup>

藤岡は度々訪問した「四谷須賀町にある」杉村宅で英三郎兄妹と蓄音器のレコードを聴いたであろうし、妹のピアノ伴奏で、讚美歌や歌曲を歌ったであろう。藤岡は歌を歌うこと、音楽を聴くことが好きだった。

中學へ入ってから、下宿宛に貰った姉（長姉）からの最初の手紙に、「あなたが居なくなつてから凜々しい歌聲が聞えなくなつて淋しい」と書いてあつた。私は唱歌が大好きで、勉強の余暇には好んで唱歌を歌っていた。中學へ入って見ると唱歌の時間がなかったのですまらなかつた。習字なんか止めて、唱歌を置けば宜いのにと思つたけれど致方がなかつた。

#### （六三）下宿生活

右は小学校を卒業して、宇和島中学に入學した時の、下は大正二年四月十二日北寮四番室から退寮し、一高最後の学期を日独学館で過ごした時の思い出である。

三年生の時、寄宿寮を出て、伊達侯爵家の経営する旧宇和島藩の寄宿舎明倫館へ入り、賑やかな神田の生活を味つては見たものの、余り騒々しいので、其後間も無く落成した日獨學館へ引移つた。日獨學館は、最初三並先生が獨逸人教會の牧師シュレーデルさんとの共同経営で、小石川上富坂に新築され、高校専門學校の生徒と大學生とを収容する一種の學寮であつた。長崎は彼の弟と一緒に、私は恒藤が京大へ入るまで一つの部屋に起臥した。何等の制限も無い全く自由な寄宿舎であつた。毎朝シュレーデルさんが、隣りにある自分の住宅から學館へ来て、オルガンを弾き乍ら讚美歌を歌つたが、これとても出席隨意であつた。私は朝、歌を歌うと好い気持ちになるので大抵出席した。

#### （二一五）日獨學館。

藤岡は、留学先ドイツから、独英仏他<sup>ほか</sup>古典の學術書と共に、ピアノ、蓄音機を買つて帰国した。長男眞佐夫氏の幼年時代、「風のとき戸戸を閉めて蓄音機を廻しレコードをかけてくれたことも何回かある。父は特にワグナーが好きだった。」藤岡は、昭和二十四年に亡くなり、遺品として「父と子」の原稿とともに、粗末な紙質の一冊の便箋綴りが残されていた。表紙には Collection of World's Classical Songs 世界名歌集と表題が書かれ、手書きしたシューベルトのセレナーデ等約一〇曲がドイツ語、英語、日本語で収められていた。これも記憶を頼りに復元したのである。三〇代半ばで地位、名声を失ひ、病に倒れ財産もなくなり、挙げ句の果て短い人生の最後は戦争に翻弄された戦災で一切の持物そして自分の人格形成努力の結晶ともいふべきものを失ひ、ひたすら故郷宇和島を想ひ父母を懐かしみ、時には世界の名

歌を口ずさんで人生の最終章を過したのかと想像するととめどなく涙が流れた。」と眞佐夫氏は記す（父母の思い出とともに）。

英三郎の母ヨシの姉、長嶺忠司の次女テイ [1862-1931] の主人は、明治のプロテスタント教会に重きをなした一人で、明治二〇年代には青山学院の初代院長でもあった本多庸一 [1848-1912] であった。ナミは少女時代に本多家の従姉妹たちの所に遊びに行ったが、伯父庸一は旅行などでいつも不在のため、団欒のない寂しい家庭で、他人を救うために家族は犠牲になっていた、としばしば南雄に語ったという。このことは、杉村家が親しい者たちが集まって楽しくむつまじく時を過していたことを示しているよう。

一高一年生の藤岡は学問の雰囲気と音楽が充ち満ちていた杉村家で、東京帝大生、一高生、女学生三姉妹の集う、和やかな家庭の中に身を置いていたと思われる。藤岡は、ドイツ留学中、脇目もふらずひたすら哲学の勉強にうちこんだ。ドイツ製ピアノを買ったのも、ドイツ人のワグナー [1813-1883] が好きだったのも、数少ない遺品として、シュベルト [1797-1828] のセレナーデが手書きされた Collection of World's Classical Songs が残されていたのも、杉村家で西洋音楽に触れたことが大きかったと推測される。

### 三 「獨法科の快男子」岩松三郎

藤岡は「南寮八番で同室であった」人物をもう一人『父と子』に記している。「獨法科の快男子」岩松三郎 [1893-12-31-1978-12-1] で

ある。彼は長じて裁判官となった<sup>(11)</sup>。

東京で最初の冬休みが来た。私の郷里へは東京から往復一週間以上かかるので、短い冬休みを私は第三富士見軒で過ごすことにした。異郷の空に一人淋しく残る私を可愛想とでも思ったのか、同室の岩松三郎と言う獨法科の快男子が、「お正月には是非遊びに来給え」と言ってくれたので、私は遠慮無く行った。彼の宅は下谷区車坂町にあったが、美味しい鴨雑煮を御馳走してくれた。

(九八 冬休み)

岩松三郎の生年月日に疑問を持たれる方もいよう。明治二十六年(一八九三)生まれの経済学者矢内原忠雄 [1863-1961-12] が恒藤や藤岡と一高の同期生であったことは知られている。ただ彼は一月生まれである。何故同年十二月生まれの、早生まれでもない岩松が藤岡と同期生でありえたのか。これについては、岩松自身の言葉がある。近代も明治の頃は、教育制度も固まっておらず、緩やかな所があったようだ。

高等学校に入学したときは、満一八歳のような顔をしていただけでもほんとは一七でした。一二月生まれなんだから、翌年でなければ小学校に入れないところを、入学したわけなんだ。高等学校へ入るときも、まだ子供でいくじもなかったわけですよ。だから、本当は工科に入りたかったのだが、たちまち意志をひるがえしちゃって、親仁のいうとおり独法科を受けたわけです。そうしたら入った。当時の第一高等学校は英法科、独法科、仏法科、文科、工科、理科、医科、農科と分れていた。しかしこれは正式の呼び方ではなかったかもしれない<sup>(12)</sup>。

「異郷の空に一人淋しく残る」藤岡を「お正月には是非遊びに来給え」と言って「美味しい鴨雑煮を御馳走してくれた」下谷区車坂町（現東京都台東区上野七丁目、東上野三丁目あたり）の岩松三郎はどういう人物であつたのだろうか。藤岡が彼について記すのは、「九八冬休み」のみであり、管見では『校友会雑誌』『向陵記』にもその名は見えない<sup>43</sup>。後年の岩松自身と、彼を知る人々の言葉に拠ろう。

代表的な民法学者我妻栄氏[1897-1973]は、岩松の六十歳を記念して後進や同学の士が企画、寄稿した論文集『岩松裁判官還暦記念訴訟と裁判』の「序」において、大学教授ではなく、その生活の大半を裁判の実務に捧げた現職の裁判官への論文集の献呈は稀であり、そのこと自体、岩松の学識の深さと人柄の床しさを物語っているとした上で、記す<sup>44</sup>。

「事件をとり扱いながら疑問に逢着し、ドイツに参考書を注文して、その到着するまで判決を延ばしたという逸話が傳えられている。眞偽のほどは保障しないが、岩松さんらしい話だと思う。しかし、この逸話は、單に岩松さんの學究的良心を示すだけのものではあるまい。「裁くこと」に對する謙虚なおそれを示すものであろう。ある時代には、判決ノイローゼにかかり、禪寺に駆け込まれたこともあるとか。」

「岩松さんは、體軀堂々の美丈夫。江戸っ子のペランメロ調でユーモアに富み、まことに豪傑肌に見える。しかし、そのユーモアには涙がある。私が胸を打たれた一つの話……、若い時から甘黨であつた岩松さんは、「葬式マンデュウ」を貰うのが嬉しかつた。ところが兄弟が多いので、いつも何分の一かし口に入らない。心ゆくばかり「葬式マンデュウ」を食べてみたいと心ひそかにあこがれをもつようにな

つた。そこで、司法官試補になつて最初に月給を貰つたときに、上野の「岡塾」にかけつけて、店頭にありつたけの「葬式マンデュウ」を買求めた。年來の宿望をかなえて、まるのままのマンデュウを兩手にもつて食べてみたが……「そうなるあまり食べられませんよ、十八ばかりで参つてしまつたんですよ」という話。」「そのほか、面白い話をいろいろ聞いた。こうした話の中にも、よく味つてみると、どこかに人世に對する深い洞察と温かい同情が含まれている。」

「判決ノイローゼ」は、岩松自身、著書『ある裁判官の歩み』の中で、僕は池田寅二郎さん[1879-1931]にはやつかいになった。一番ひどい神経衰弱になつたのは、東京控訴院部長のときでした。大審院部長の池田さんの所へ行つた僕を中村天風さん[1876-1938]のところに連れていつてくれた、ありがたい人だつたと語っている。最初の裁判嫌悪症は後掲する。本書は、日本評論社が企画、岩松が司法研修所長鈴木忠一、最高裁判所経理局長岩野徹ら、門下のペラン裁判官四人を開き手として、司法制度・民事訴訟法・裁判実務等に関する考えや経験を、天衣無縫縦横無尽に語つた座談で、前著の十一年後に刊行された。その「まえがき」に、岩松の兄事した最高裁判事真野毅氏[1868-1936]は記す<sup>45</sup>。

「裁判官席の岩松君を弁護士席の私が眺めた当時の印象は、色の黒い（後で魚釣のせいだと知つたが）おっとりとした風貌で悠揚迫らず割合テキパキと審いていた姿である。結審しても判決は遅いという風評はあつた。それは慎重すぎるほど慎重であるからだと後で知つた。」「長い交りから岩松君を一言で評すれば、表裏のない純良そのものといった性格である。大きな赤ん坊（色こそ黒いが）といった感じ

がする。それでいて民訴が好きで好きでたまらぬという本質があった。「私が最高裁に入ってから常々感じたことは、裁判官プロパー出身の人々を含めて、法律実務と学理的基礎をしつかりと兼ね備えている人物が案外少ないということであった。私はこの両者が一つの人格の中に均斉をとって化体していなければ優れた裁判官とはいえないと思う。岩松君はその稀少な貴重な存在として、私は常に尊敬を払っていた。」

最初のエントシャイドンクス・アプシヨイ (Entscheidungs abscheu)、裁判嫌悪症になった時、岩松は七歳年長の医者、高木小三郎<sup>(註)</sup>の許に相談に行った。堂々たる座談の雄である岩松の肉声であり、自分の心理を生き生きと描写、こういう人物であれば、「異郷の空に一人淋しく残る」藤岡が気にかかるだろうと、その人間性も推察されるので、事の経緯を、「裁判の壁——山路愛山事件のこと」に聞こう。愛山 [1864-1917] が死去したのは大正六年である。

「私の親しい友人で判事だった人ですが、その人の部に私が知っている民事事件がかかったことがあるんです。有名な新聞記者で山路愛山、それが田舎の百姓に金を貸して、いつでも金を返したときは返してやるという約束で土地を担保に取った、契約書の面はいわゆる譲渡担保であった。しかし、期限にかかわらず金さえ返せば土地は返すという約束だった。私はそれをたまたまその百姓の家を借りて避暑していたので知っていたんです。山路愛山が死んじやってから、その相続人に対して、百姓の方から金を返すから土地を戻せという訴が起されたが、愛山の相続人の方はいやそんなことはない、この証文の通りだといって買い戻しに応じなかった。その事件がその部にかかったの

です。私は中身は知っていたけれども、担当の判事にいっちゃいけないでしょう。私はいわないでいました。そうしたら認定は、そういう特約はないんだといって請求棄却されちゃった。

ところでそのときに、ああ、裁判所というのは証人調べはしても、普通ありえないことはなかなか信用しない。だから、裁判するにもよほど注意しないと、誤判というものはあるのだということをしみじみ感じて、自分が裁判をやっても、やはり間違いがあろう、こういうふう思うようになりまして、だんだんわからなくなってくるんだ。事実認定がわからぬ。自由心証だけれども、やればやれるけれども、裁判というものは間違ふことがあるんだということを思い出すと、何かいやになりまして、裁判官をやめなさいと思っていやになった。判事になって五年目くらいでした。よそうと思った。

それで、兄貴のようにしていたお医者さんがいるんですが、その人は、上海で野村吉三郎さんが爆弾だけがをしたときに、戦地に大勢軍医がいたのに、わざわざ日本からその人が手術に行くくらい外科医としても陸軍部内でも偉い人ですが、その人と私、兄弟のように懇意にしておりまして、そこに相談に行つたのです。「裁判するのが恐ろしくなった。私は裁判官に適当でないと思うから、止めようと思う。」といったんです。」

先の論文集「序」を我妻氏は、多年の蘊蓄を何等かの形に著述されることを希望したい。一日も早く岩松さんの論著の現われることを学界のために希望しながら筆をおく。と結んだが、年来の注解強制執行法の刊行を、第一法規出版株式会社が企画、編集委員が学会及び実務家に依頼、前著から七年後に、『岩松三郎先生喜寿記念 注解強制執行



法』岩野ほか編第一巻が生まれた(56・8)。該書は、鈴木ほか編第二、三、四、五巻と続く他に類をみない大部な注釈書で、岩松から受けた学恩に対する記念として、年内には最後の第五巻をと、鋭意努力中の十二月一日に岩松は永眠、二ヶ月後に完結をみた(54・2)。

年長者に愛され、後進に慕われ、深い学識と「裁くこと」に対する謙虚なおそれを持ち続けた岩松。「葬式マンデウ」の話には「獨法科の快男子」岩松の面目躍如たるものがある。「異郷の空に一人淋しく残る」筈であった、姉三人、田舎育ちの藤岡は、下谷区車坂町の岩松家で、大勢の兄弟に囲まれ、「美味しい鴨雑煮を御馳走」になり、楽しく幸せな下町の正月を味わったことであろう。

#### 四 全寮制寄宿寮と人格形成

井川も長崎も一年時の寮仲間との写真を残している。井川は卒業前の大正二年五月十四日に南寮十番の仲間と(『向陵記』口絵写真6)、長崎は一年生の明治四十四年一月九日に西寮九番の仲間と(関口安義『評伝長崎太郎』口絵写真)。地方の中学から日本の首都東京に来て、天下の俊才の集まる一高で、一年間寝食を共にした仲間は、多士済々たる一高時代の交友は、「長い年月を経た今日でも」「心に甦る」ものであった。藤岡の『父と子』はしがきには、「数十葉の寫真とが、戦災のため全部消失した」とある。その中には南寮八番の仲間との写真もあったと推測される。

「一室に各科各組の者が寄り集まっていた」「一年生の時」藤岡には、

杉村や岩松のような友人がいた。確かに「色々な特長も見られたので面白かった」ということが実感として伝わってくる。芥川や井川とは違った味わいの人物であり、藤岡の人となりも照射される。

藤岡蔵六の回想録『父と子』の原点に、一高における三年間の思索と体験があった。芥川龍之介や井川恭らとの交友に触発されるころが大きかった。加うるに本稿では、一年時の、専攻の異なる杉村英三郎や岩松三郎との交友を考察した。質実剛健で、強い責任感と心配りの深い杉村、人世に対する深い洞察と温かい同情を身につけ、表裏のない純良そのものといった性格の岩松、彼らとの交友が藤岡の人格形成に大きく寄与したであろうことが、杉村や岩松の人物像から窺える。その交友に「人づき合いのまずさ」「他者への配慮を欠いた性向」は見出せない。

藤岡は、ドイツのフライブルク大学へ入学してフッセル[1869-1938]教授の指導を受けた時、「同教授は私に向い、「貴君は、笑う哲学者Lachender Philosophだ」と言われた。真に思い半に過ぐる者があった。」(七〇 快活)と記す<sup>(30)</sup>。学問に対する自信が大きかった故であろうが、外交官二代の杉村家での経験も、伸び伸びと留学生生活を送る一因となっていたのではなからうか。「人づき合いのまずさ」「他者への配慮を欠いた性向」といった評には、別の問題が想定される。

注

- (1) 井川は大正五年十一月二十一日、恒藤規隆長女まき(雅)と結婚、恒藤姓となる。
- (2) 当時、一高の学部は、第一部甲類(英語法科・政治科・経済科)、乙類(英語文科)、丙類(独語法科・独語文科)、丁類(仏語法科・仏語文科)、第二部甲類(工科)、乙類(理科・農科・薬学科)、第三部英(医科)、第三部独(医科)と分れていた。
- (3) 関口安義『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』イー・ディ・アイ 2004.7。同「一高の三羽鳥」『資料と研究』第14輯(山梨県立文学館)二〇〇九年三月、『芥川龍之介新論』翰林書房 2012.5。拙稿「哲学者藤岡蔵六と芥川龍之介」『文学史研究』54号(大阪市立大学国語国文学会二〇一四年三月)。
- (4) 藤岡眞佐夫『父母の思い出とともに』私家版一九九八年十一月。その後の藤岡は、大正五年哲学科を首席で卒業、六年四月から十年三月まで四年間、哲学科研究室副手、十年七月多くの先輩より先に文部省在外研究員として留学、同年九月コーエン『純粹認識の論理學』訳述を岩波書店から出版。ドイツのフライブルグ大学へ二年間在学しフッセル教授の下に哲学を研究、十三年一月帰国し、同年九月旧制甲南高校に赴任。
- (6) 注(3)の拙稿「哲学者藤岡蔵六と芥川龍之介」
- (7) 前稿「藤岡蔵六『父と子』と恒藤恭、芥川龍之介―第一高等学
- (8) 校時代の旅と読書―『文学史研究』55号(大阪市立大学国語国文学会 二〇一五年三月)。
- (9) 『帝国大学出身人名辞典』(『帝国大学出身名鑑』(校友調査会昭和7年)復刻)第2巻 日本図書センター、2003.3。英三郎の没年は、妹アサ、タカのそれと共に、陽太郎の外孫太田進氏男の杉村修氏より平成11年7月14日に盛岡市先人記念館に寄贈された杉村家系図に拠る。
- (10) 柴田南雄「わが音楽わが人生」第2章 母方の祖先から母まふ」岩波書店1995.9。
- (11) ルノアールの絵に『範籠を持つ少女』がある。
- (12) 『国史大辞典』第八巻 吉川弘文館 昭和六十二年十月、注(9)の柴田著。
- (13) 『帝国大学出身人名辞典』第2巻、猪俣道也「朝鮮半島の地質研究余談・・・事実は小説よりも奇なり(フランスの柔道)」(『農大書報』112(第45巻第1号(2001(平成13年)7月東京農業大学教育後援会)中の次兄欣次郎長男杉村新(陽太郎の甥)の文章。
- (14) 『帝国大学出身人名辞典』第2巻、矢野健太郎「杉村欣次郎先生を偲ぶ」『数学セミナー』21(2) 日本評論社1982.2。ナミの没年は、夫雄次の生年と併せて、平成26年8月1日に英三郎妹アサの嫁いだ福島家のとき子氏(故福島新吾氏妻)より同館に寄贈の福島新吾氏調査資料中の次の資料に拠る。A-5012-29「故柴田雄次・南美のいばれ話ぬきぎや」(97.4.2追悼会)
- (15)



(16) 注(9)の柴田著、アサ、タカの生年も、注(8)の杉村家系図に拠る。

(17) 注(9)の柴田著、菊池孝育「岩手からのカナダ移住物語」112『盛岡タイムス』2012.7.12、7.19

(18) 注(9)の柴田著、「杉村潜の史実発掘——足跡追ったFDP  
Ⅱ(上)(中)(下)Ⅱ日本移民導入に尽力Ⅱ笠戸丸を見ずに他界」「ニッケイ新聞」(ブラジルのサンパウロ州サンパウロ市で発行されている移住者や日系人、駐在員向けの日本語新聞。週5回発行)2007年11月15日、17日、20日

(19) 注(17)の「岩手からのカナダ移住物語」1122

(20) 鈴木貞次郎「伯國<sup>ブラジル</sup>日本移民の草分」「復刻版」日本図書センター1989.6(日系移民資料集第2期南米編3 昭和戦前期編2第24巻)

(21) 注(20)に同じ。

(22) 注(18)の「杉村潜の史実発掘——足跡追ったFDPⅡ(上)(中)Ⅱ日本移民導入に尽力Ⅱ笠戸丸を見ずに他界」。なお、杉村潜は、『物故先驅者列傳…日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人びと』(日本移民五十年祭委員会編1988.8日本移民五十年祭委員会サンパウロ)に、取り上げられており、サンパウロ人文科学研究所HPにも紹介されている。芥川の府立三中時代の親友で、妻文の叔父である山本喜督司の『山本喜督司評伝』(山本喜督司評伝編集委員会編1981.3)が同所から出版されているのも奇しき因縁である。

(23) 注(9)に同じ。

(24) 「わが音楽わが人生」「第3章 父のこと」。芥川にも「学問」(『追憶』)がある、

(25) 南雄は続けて記す。この大田南岳の塾の新年のかたる大会が一風変わっていて、「そのかるたが普通の百人一首じゃないんです。唐詩選かるたというのをこしらえて、唐詩選の五言絶句の上二句を読んで、下二句の札を取らせるんです」。「ただ棒暗記で「主人不相識」と読み出すと、いち早く「莫謾愁沽酒 囊中自有錢」の札を取るという次第」。三重県桑名市では、今も残る「詩かるた」を市の無形民俗文化財に指定して、毎年正月の行事としてかるた会を催している。市教育委員会発行の説明書には、七四種の読み札と取り札が掲載されているが、その最初の一枚が、父が例に挙げた「主人不相識」なのである。他の有名な詩、たとえば孟浩然の「春眠不觉曉」や、李白の「白髮三千丈」をさしおいて、賀知章の「主人不相識」を挙げたのは、おそらく明治時代の「詩かるた」で、この詩が先頭に置かれていたからではなからうか。また、父は日本の民謡にはまったく興味がなかったと思うが、「忍路<sup>わしよろ</sup>高島、及びもないが、せめて歌棄<sup>うんす</sup>、磯谷<sup>いそや</sup>まで」といった文句は、知っていたとも記す。

(26) 注(13)に同じ。

(27) 注(9)に同じ。

(28) 注(14)の矢野健太郎「杉村欣次郎先生を偲ぶ」。矢野氏は、下記の冒頭の思ひ出「……アンリ・ポアンカレ研究所へ通って微分幾何学を研究するという生活を始めていた。」に続けて、「しかし昭和12年7月には、宣戦布告なしで日本の中国侵略戦

争が始まり、パリでは、中国側の巧みな宣伝活動もあって、日本の評判は悪くなる一方であった。そこで日本政府は、当時一流の外交官と認められていた杉村陽太郎イタリア大使をフランス大使に任命した。」と記す。

(29) 『国史大辞典』第八巻 吉川弘文館 昭和六十二年十月

(30) 注(9)に同じ。

(31) 注(14)の『帝国大学出身人名辞典』。

(32) 注(20)に同じ。

(33) 注(9)に同じ。アサの四男政治学者福島新吾は、ブラジルに赴いて濬について調査、盛岡では杉村家先祖の事跡を訪ねている。従兄である著者柴田は、「第2章 母方の祖先から母まで」は彼の資料のお蔭による所が大きいと記す。なお、明治時代中期頃までは、「きしゃ」の表記は「汽車」よりも「瀛車」が一般的であった(『日本国語大辞典』語誌)。

(34) 明治二十三年(1888)十月に組織された第一高等学校校友会の機関誌。明治二十年代から戦中まで発行され、一高生の青春の記録となっている。

(35) 井川恭(のちの恒藤恭)の日記。一高入学入寮の「第一巻」(明治四十三年九月十一日〜十一月廿九日)から卒業、京大進学の「第八巻」(大正二年四月十二日〜十月二日)まで。原本は大阪市立大学恒藤記念室に寄託、保管されており、『向陵記―恒藤恭一高時代の日記―』(大阪市立大学大学史資料室編 二〇〇三年三月)として翻刻されている。引用は原本に拠るが、原本にある実名は、登場人物のプライバシーにかかわって配慮

すべきと判断し、「\*\*\*」のように記載したという翻刻方針に従った。

(36) 明治三十一年五月に発足した団体。最初は二年生が中心となって発足したことにその名が由来し、もともと非公式な親睦会にすぎなかったが、のちに規約違反者の制裁を任務とする団体となり、鉄拳制裁をおこなうなどした。

(37) 前稿(注(7))に引用した、大正二年六月末の「一一八一高卒業記念旅行」の、伊香保で芥川、藤岡と一緒にになり、共に上野まで帰った紳士の親戚、「新陸相楠瀬中 将」楠瀬幸彦[1868-1927]も明治二十七年臨時京城公使館付となり、事件に関与した。

(38) 注(8)の『帝国大学出身人名辞典』、広山 謙介「鴻池家の信託業への進出(1)―鴻池信託株式会社の概観とその人的構成―『経営と経済』63(2・3)1985-10、三和銀行史刊行委員会編『三和銀行史』三和銀行 昭和二十九年三月

(39) 注(24)に同じ。

(40) 注(9)に同じ。

(41) 一高卒業後、大正六年七月東京帝国大学法科大学法律学科(独逸法兼修)卒業、八月司法官試補、八年三月判事任。昭和九年九月東京控訴院部長、十一年三月大審院判事補。広島、大阪、東京民事の地方裁判所長歴任、二十一年二月福岡控訴院長補、二十二年八月最高裁判所判事任。三十一年十一月退官。(『帝国大学出身人名辞典』第1巻、「岩松三郎先生略歴」『岩松三郎先生喜寿記念 注解強制執行法』第一巻)。

(42) 岩松三郎『ある裁判官の歩み』日本評論社 1967・9

(43) 正式の呼称は注(2)参照。

(44) 例えば、「一年に入ったら、一高の寮で細川潤一郎と一緒にした。あれは一年の時から司法官志望だった」(『ある裁判官の歩み』)とある細川は、杉村の事蹟で引用した「辯論部報」(『校友会雑誌』)に、杉村に続いて、「(三) 木下先生は永久に死せず 一、一、四 細川潤一郎君」とある。細川は、東京他方裁判所部長判事、東京控訴院判事、弁護士、法政大学教授を経て座談会当時、麻布高等学校長であった。

想している。連想で留学時のことを記すのには、オイッケン [1886-1926] 博士を訪問したの(一〇九 オイッケン会) などがある。

(たかしげくみ・

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化センター研究員)

(45) 垂水克己、兼子一編『岩松裁判官還暦記念 訴訟と裁判』有斐閣

昭和三十一年七月

(46) 注(42)に同じ。

(47) 昭和七年上海爆弾事件の野村吉三郎 [1877-1964] を手術した高木は、当時、東京第二衛戍病院長兼陸軍軍医学校教官であった(『帝国大学出身人名辞典』第2巻)。

(48) 第一巻(総則 §§497-563) (S49・8)、第二巻(動産執行 §§564-639) (S51・2)、第三巻(不動産執行 §§640-716) (S51・11)、第四巻(船舶執行・非金銭執行・仮差押仮処分 §§717-763) (S53・6)、第五巻(特殊保全処分・総合事項索引) (S54・2)。

(49) 日本エディタースクール出版部 二〇一〇年十月

(50) 『父と子』は、大正二年で擱筆されるが、「七〇 快活」では、一高時代に度々訪 問した芥川家で、芥川の母が藤岡を愉快な方と捉えたことに関連して、留学時のフッセル教授の言を回